★総合授業力リーダーに学ぶ　授業づくり Q&A★

さぬきの授業

基礎・基本

実践事例集別冊 V

～子どもに学びのときめきを～

平成30年2月
香川県教育委員会

目　次

Ⅰ　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１ｐ

Ⅱ　総合授業力リーダーに学ぶ　授業づくりＱ&Ａ

○　教師の表情・話し方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２ｐ

○　発問・助言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３ｐ

○　指名、発言の取り上げ方・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６ｐ

○　机間指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・８ｐ

○　ノート指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・９ｐ

○　グループ学習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１０ｐ

○　学習意欲を高める指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７ｐ

○　考える力を育てる指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６ｐ

○　子どもの実態に合わせた指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０ｐ

Ⅲ　おわりに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３１ｐ

Ⅰ　はじめに

「どうすれば授業がうまくなるのですか」、「どんな発問が良い発問ですか」、「グループ学習するけどうまくいかない」等、日々授業改善に真摯に取り組んでいる先生方からは、「授業すればするほど疑問や悩みが出てきます」といった声を聞くことがあります。そのような課題の解決にあたって、授業改善のヒントを掴んでいただくために、県教育委員会では総合授業力リーダーによる授業公開を実施しています。

この取組は、今年度で１０年目を迎えており、現在、小、中学校それぞれ１５名の総合授業力リーダーが、優れた実践の継承と、県内教員の授業力の向上に資することを目的として授業を公開していただいております。

総合授業力リーダーの先生方には、授業づくりの視点として「さぬきの授業　基礎・基本〔改訂版〕」の活用をお願いするとともに、事後討議においても、「成果と課題」を討議の柱にするのではなく、「本時の、あるいは普段の、どのような取組が、本時を成立させているのか」いったことなどを協議するようお願いしています。

参会者においても、「さぬきの授業　基礎・基本〔改訂版〕」を手がかりの１つとして、本時を支える普段の取組（教科経営、学級経営、教材研究）等について、自分の学校や授業を行う学級の実態を踏まえ、どのように授業づくりをしていくのかといった視点で総合授業力リーダーの授業を参観されたことと思います。

本冊子は、総合授業力リーダーの実践をＱ＆Ａ形式でまとめたものであり、「さぬきの授業　基礎・基本〔改訂版〕」とあわせて活用いただくことで、日々の教育活動を踏まえて、授業づくりの視点を考えることができるのではないかと思っています。

最後になりましたが、力のこもった授業づくり・授業公開をしていただいた総合授業力リーダーの先生方、運営等にご協力いただいた校長先生、教頭先生をはじめとする各校の教職員の方々、その他関係者の方々に深く御礼申し上げます。

Ⅱ　総合授業カリーダーに学ぶ　授業づくりＱ＆Ａ

教師の表情・話し方

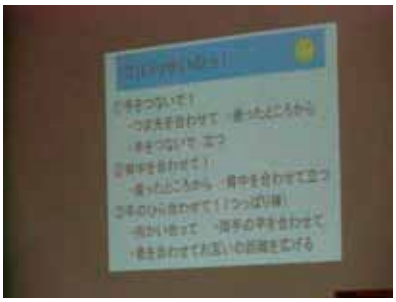
観音寺市立大野原中学校　第１学年保健体育科「体つくり運動」（高橋利彰先生）の実践に学ぶ

Q　体育実技が苦手な子どもがいます。楽しく活動に取り組むにはどうすればよいのでしょうか。

A　子どもが取り組みたくなるような環境づくりや、友達と助け合いながら活動できるようにします。

具体的実践から

１　リラックスできる環境づくり



集団（グループ）でボールを使った運動を行っている時「〇〇くん、△△さん」と声をかけ合いながらボールを操作していました。運動にあわせた音楽を準備したり、運動のポイントについて大きく表示したりするなど、聴覚や視覚に訴える準備ができており、苦手な子どもに対する配慮がされていました。（写真上）緊張している子どもたちに対し、指導者が気付きにつながる声かけをしたり、一緒に運動したりすることを通して、生徒たちの心と体がほぐれていく様子が印象的でした。（写真中）

２　仲間とともに学ぶ

誰と誰がペアやグループになっても、相手の状態に気付いたり、相手を意識したりした行動が見られました。また、ボールを使った運動では、ボールを動かす（つなぐ）ことを通して「一人ひとりが大切にされる温かい集団づくり」につながる、自他への気付き・調整・交流を学ぶ様子も見られました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

教師の表情・話し方　（P.4.5）

〇　身振り手振りを組み合わせることで、表現が強調されます。

〇　ねらいに応じた話し方を意識することで、伝わりやすくなります。

東かがわ市立大川中学校　第２学年社会科「日本の諸地域関東」（井原みゆき先生）の実践に学ぶ

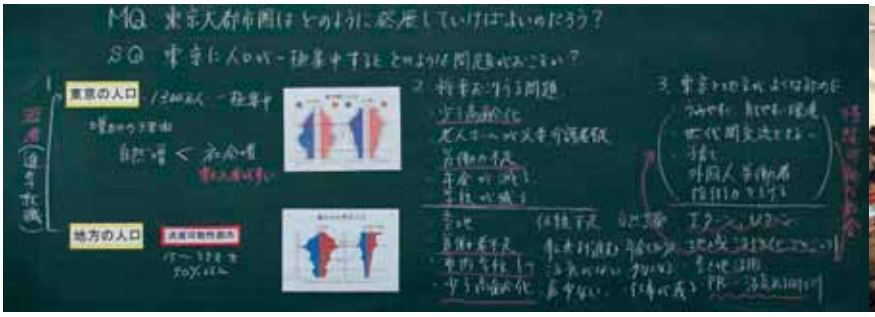
Q 資料を読み取る活動が苦手な子どもがいます。どうすれば、資料を読み取る力が身に付くでしょうか。

A 資料のどこに注目すればよいか、視点を明確にした発問・助言を意識してはどうでしょうか。

具体的実践から

１　２つの事象を比較する活動

東京都と東かがわ市の、現在と 20 年後(予測)の４つの人口ピラミッドを提示し、「現在の東かがわ市の人口構成は、東京都と比べるとどんな特徴がありますか」等、資料を見る視点を簡潔かつ明確に発問していました。また、「生産年齢人口」という語句を確認する助言を行うことで、生徒は、自信を持って見出した特徴を説明することにつながっていました。特徴を全体で共有したのちに、「東京都の将来には、どのような問題点が考えられるかな」と発問をつなげていました。



２　生徒に寄り添った共感的な助言や対応

生徒の多様な考えを受け入れ、間違いも受け止めて全体に返したり、上手に次につないだりしていました。そのため、「どんな発言も先生が受け止めてくれる」という安心感の中、活発に手が上がり、授業が進んでいました。自分の考えを堂々と説明した生徒に対し、先生が「〇〇さんは、自信を持って間違えを説明できるね」と共感的に称賛し、発表した本人はもとより、学級全体に笑顔が広がっていました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

発問・助言

〇　学習を深めるよい発問とは？

〇　タイミングよく、子どもの思考を方向付けするように助言する。（P.6.7）

高松市立香東中学校　第２学年道徳「美しい母の顔」（大北佳苗先生）の実践に学ぶ

Q 親に対して反抗する子どもがいます。家族の愛情や支えについて考えるにはどうすればよいのでしょうか。

A 自分の心の弱さに気付くようなしかけや、家族の行動の裏にある思いについて話し合う機会を設けてはどうでしょう。

具体的実践から

１　子どもの意見から全体を揺さぶる

資料前半での主人公の行動に対し、「あなたは」どう思うかと問い、青のハート（同感）・赤のハート（反論）で提示することで、視覚的にも分かりやすいという効果がありました。これにより、考えるのが苦手な生徒も、自分なりの意見を持ちながら臨むことができていました。特に、同感の意を示した生徒の意見に着目し、教師が全体に揺さぶりをかけることで、心の弱さが誰にでもあるということに気付いている様子が見られました。

２　多面的・多角的に考える工夫

資料を前半部分と後半部分に分けて読むことで、主人公の行動に対する各自の考えを確認しながら、中心発問へとつないでいました。中心発問については、子どもがある程度一人で考えた後、３つの観点を示し、さらに深く考えていく手立てが用意されていました。このため、班で意見の交流をした際にも、３つの観点を手がかりに話が進み、ホワイトボードにまとめた言葉にも様々な角度から思考した跡が見られました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

発問・助言

○　学習を深めるよい発問とは？

○　タイミングよく、子どもの思考を方向付けるよう助言する。（P.6.7）

丸亀市立飯山北小学校　第６学年道徳「一枚の新聞」（尾崎佳央里先生）の実践に学ぶ

Q 登場人物を自分と関わらせながら道徳の学習を深めていくためには、どのようなことに気を付ければよいでしょうか。

A 身近な出来事や経験を振り返らせたり、子どもの考えをゆさぶったりするなどの工夫をしてはどうでしょう。

具体的実践から

１　経験の振り返り

新聞配達にがんばる明は、ある日、新聞を１枚配り残してしまいます。ちょうどその日は、塾の進級テストの日…。

教師はここで、「みんな、進級テストみたいなもの、受けたことがある？」と問いかけました。子どもたちは「空手」「英検」「スイミング」と、自分のがんばったことを思い出します。それにより、「もし、今回のチャンスを逃したら、また何ヶ月も待たなければならない。」「今までがんばったことが無駄になってしまう。」と具体的に想像し、主人公の立場を自分事として考えていきました。

２　ゆさぶり

塾よりも配り残した新聞の配達を選んだ明は、「これでいいんだ。」とつぶやきます。子どもたちは、この時の明の思いに共感し、「自分のことよりみんなのこと」など、すぐに自分の考えを書き始めました。そこで教師はもう一度、「進級テストは受けなくていいの？」とゆさぶります。子どもたちは自分の心の中をもう一度振り返り、自分の本心を表出していきました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

発問・助言　「学習を深める良い発問とは？」
- ○　簡潔明瞭である
- ○　広がり、深まり、方向付けがある
- ○　具体的かつ的確である　（P.６）

多度津小学校　第６学年国語科「多度津町の未来をえがこう」
(町の幸福論ーコミュニティデザインを考える)（髙木幸枝先生）の実践に学ぶ

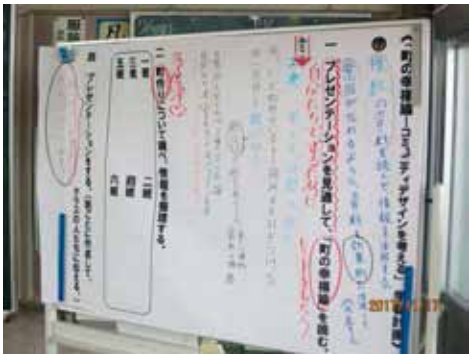
Q　目的をもって、課題解決に向かって思考を進めていくようにするにはどうすればよいのでしょうか。

A　単元計画を掲示したり、課題解決に必要な言葉をタイミングよく投げかけたりしましょう。

具体的実践から

１　子どもの学びとともに更新する単元計画

多度津町の未来についてプレゼンテーションをするというゴールに向かって、教室に単元計画を掲示していました（下写真）。この単元計画の工夫点の一つは、空白部分を残しているということです。決まったレールを進んでいくのではなく、学習を進めていく中で随時軌道修正しながら、次にすべきことを決めていくということでしょう。子どもとともにつくっていくという学びの現れではないでしょうか。



２　ことばをつないで思考を促す

子どもたちの思考が行き詰まった時、教師がタイミングよく言葉を投げかけていました。「一例目は？」と教師が投げかけると、「一例目は～。」「二例目は～。」と自然に発言が続いていました。

また、発言が止まったときに、教師が「例えばこんなのがあるよって言ってあげて。」と声かけをすると、一人の子が発言をしました。それを聞いた周囲の子どもたちの中から、別の男の子が、友達の考えのヒントとなる発言をし始めました。考えの浮かんだ子どもの発言をきっかけに、みんなで高まっていく姿が印象的でした。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

指名、発言の取り上げ方
○　発言を取り上げ、学級みんなのものにするのは、教師の役割
・　発言者の考えを他の子どもの思考の材料にする工夫をする（P.９）

高松市立牟礼北小学校　第３学年算数「１億までの数」（浅野佳子先生）の実践に学ぶ

Q 決まった子どもばかりが発言する場合、発言をしない子にはどのように指導すればよいですか。

A ペアやグループで考えさせたり、机間指導で考えのよさを認め伝えることで勇気づけたりしてはどうでしょう。

具体的実践から

１　机間指導で自信のない児童と一緒に考える

子どもから発言が生まれるために「気付きが生まれる教材の開発（『位アップ』の枠）」や全児童を見渡すために机間指導の動線の計画等の多様な工夫がなされていました。また、「Ａさんのノートを見に行ってごらん。何がいいか分かりますか。」と問いかけ、互いに学び合うことを促し、進んで他者を認めようとする雰囲気をつくっていました。

２　ペアで発表する場面をつくり、自信を持たせる

「Ｂさん、Ｃさんといっしょに黒板に４０×１０の考え方の図をつくって説明してくれる。」いつもは発表をほとんどしないＢさんも、Ｃさんといっしょに考えて発表することで、安心感をもち説明することができました。また、他の児童からは、　友達の発表を聞いた後、友達の頑張りに拍手を送ろうと進言するが場面がみられました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

指名、発言の取り上げ方　（P.8）

○　発表が苦手な子どもに自信を持たせたい時

- 読む部分や指名する順番を伝えて、見通しを持たせる。
- モデルを示した後に指名するなど、発表しやすい環境を整える

坂出市立白峰中学校　第１学年美術科『伝わる文字デザイン「今、伝えたい言葉」』（中尾孝志先生）の実践に学ぶ

Q 子どもがアイデアを提案したり、イメージをうまく伝えたりすることができません。どうすればよいのでしょうか。

A 具体的な例を比較したり、アイデアを組み合わせたりすることを通して話し合ってみてはどうでしょう。

具体的実践から

１　理解を深める視覚支援

「同じ言葉でも、伝えたいイメージが異なるときにはどうするの？」に対する支援として、発想法の違いによる効果を考えるデザインカードを数種類用意していました。そのデザインカードを示しながら、どんな印象を受けるか、どんな効果があるかを問いかけていました。生徒は、デザインを工夫することで伝えたいイメージに合った表現ができることを実感していました。

２　アイデアを創出するワークシート

アイデアスケッチを行うワークシートに、生徒が言葉をデザインするのに必要な造形的な視点が多くの作例と共に示されており、子どもたちは、自分の表したいイメージに近い作例を参考にしながら、多くのアイデアを出す様子が見られました。また、座席表を活用して、これまでの生徒の取組の状況を把握しながら机間指導を行い、的確な助言等が行われていました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

机間指導　（P.１１）

○　一人一人の学習過程を評価し、個別に指導することで自己有用感を高める。

学習意欲を高める指導　（P.１９）

○　子どもが、「できるようになりたい」「挑戦したい」と思える工夫をしましょう。

宇多津町立宇多津北小学校　第４学年理科「月や星の動き」（高木佐和先生）の実践に学ぶ

Q 書くことが苦手な子どもがいます。書く習慣をつけるためにはどうすればよいのでしょうか。

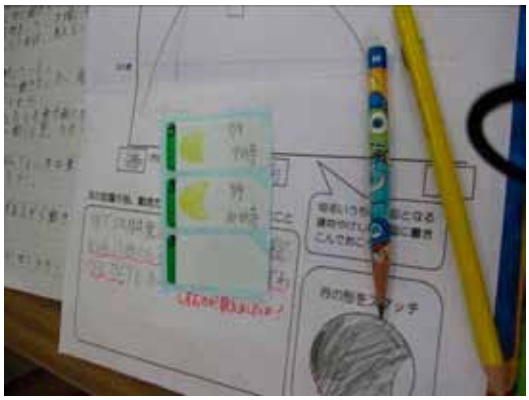
A ノートのとり方について共通理解を図るとともに、子どもの発達段階に応じたまとめ方を示してはどうでしょう。

具体的実践から

１　書く（記録する）ことの継続

昼間に観測できる太陽と違って、月の動きの観察は容易ではありません。「いつ、どんな月が、どこにあるか調べよう」ということで継続観測を行い、それを記録させていました。振り返りの記入を指示した場面では、ある児童が「もう書いてしまっているよ。」と発言しました。振り返りを書くことが、普段の授業の中で日常化できている様子がうかがえました。

２　子どもの発達段階に合わせたまとめ方の工夫



観察結果のまとめを、児童からの発言を生かして教師が導いていました。中学年では、教師がリードして児童にまとめさせますが、高学年では、個々の児童に「考察」として、まとめをさせて指導するようにしているようです。「実験や観察の結果から課題についてまとめる力」について、発達段階を考慮して、段階的に指導している様子がうかがえました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

ノート指導

○　目的に応じた書き方を指導する。

○　ノート指導を通して、子どもの学ぶ意欲を高める。　　（P.１４.１５）

高松市立弦打小学校　第３学年国語科「世界のくふうについて知ってＱ」（山地貴子先生）の実践に学ぶ

Q 子どもたちの話合いの場を設定し、自分たちで話し合うことを目指しているのですが、なかなかうまくできません。

A グループ活動は子どもたちに任せる場面だからこそ、教師の適切な支援が一層重要になります。

具体的実践から

１　細やかな支援の連続

導入で、授業者は子どもたちの中の考えの違いをカードで明示し、解決すべきことを明確にしました。グループ活動に入る前には、「必ず言葉を返すようにしましょう。」と話合い方の確認をし、いざ話し合う場面では、付箋を活用した各自のノートや、教科書に掲載されている絵図など、話合いの拠り所をもたせていました。

「私は〇〇だと思います。わけは～」のように、「結論は短く、理由は詳しく述べる」という話形の定着からは、普段の地道な指導がうかがえました。

【教科書を指しながら話し合う】

２　話合いの良さの実感

話合いを経ても、二つの考えのどちらが良いか、まだ子どもたちの考えはまとまりませんでした。それでも授業者は、意図する方向に導いたりせず、子どもたちの発言を確かめながら子どもたちに判断させました。そしてようやく全員が納得。子どもたちのすっきりとした表情が、自分たちで疑問を解決できた喜びを物語っていました。

【このカードの位置付けは？】

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

グループ学習　（P.１６、１７）

〇　「何のためのグループ学習か？」教師の意図を明確にする。

- 一人一人の立場や意見を確かにして深めたり、新しい考えに気付き広げたりするため
- 対話的な問題解決を通して、共に学ぶことの良さを実感させるため

丸亀市立西中学校　第１学年社会科「世界の諸地域オセアニア」（御厨貴利先生）の実践に学ぶ

Q 自分の考えを発表することが苦手な生徒がいます。どうすればよいのでしょうか。

A 子どもにとって身近な課題設定の工夫や、グループでの話合い活動のなかで、発表の機会を設けてはどうでしょう。

具体的実践から

１　子どもの認識のズレを学習課題に

導入で「うどん」「小麦粉」「うどん屋さんの写真」等、生徒の興味を引き付ける物を準備し、教師の生徒との絶妙なやりとりをテンポよく行いながら、学習課題をつくっていきました。授業を進める中で、子どもたちは自然な形で「なぜ、さぬきうどんにオーストラリア産の小麦が使われているのか。」を自分自身の学習課題としてとらえる様子が見られました。

２　グループ活動のねらいの明確化

「予想を確かめ合うために話し合う」「自分の考えを伝えるとともに、班員の考えを聞いて自分の考えを修正するために話し合う」など、２回のグループ活動がそれぞれ何のために行うのか、その目的を共有してグループ活動が進められていました。一部の生徒だけでなく、全ての生徒が、「資料に基づいて自分の考えを説明する」という社会科として最も大切にしてほしい学びのプロセスが確保できています。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

グループ学習

○　「何のためのグループ学習か？」教師の意図を明確にする。

○　効果的なグループ学習のために　（P.１６.１７）

琴平町立琴平中学校　第２学年家庭科「献立作りと食品の選択」（氏家智子先生）の実践に学ぶ

Q グループ学習で１人の正しい意見に流され、話合いが活発になりません。どうすればよいのでしょうか。

A 自分の考えをもたせる工夫や、グループでの役割をもたせてはどうでしょう。

具体的実践から

１　立場や意見を明確にする

「サバの煮付けに合う朝食メニューを考えよう」の学習課題のもと、栄養・時間・安全性・環境という４つから自分が担当する視点を決め、その視点からメニュー選びをすることで、子どもが自分の考えに明確な根拠を持つことができていました。このことが、他の視点の友達と意見を交換する際、比較・関連付けしながら互いの意見に折り合いをつけてグループとしての考えを練り上げる姿につながっていました。

２　意図されたグループの設定

ジグソー法を取り入れたグループ学習でした。導入部分のやり取り等から、生徒との信頼関係を感じることができ、発言しやすい雰囲気作りができていました。４つの側面に分かれたときには、側面ごとに資料が準備されており、話し合う内容がより分かりやすくなる工夫が見られました。最初に各分担で話し合うことで、一人一人が自分の意見をもち、グループでの話し合いに安心して参加できている様子が見られました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

グループ学習

○　「何のためのグループ学習か？」教師の意図を明確にする。

○　効果的なグループ学習のために　（P.１６.１７）

さぬき市立志度中学校　第１学年技術科「生活に役立つ木製品の製作」（寺井英登先生）の実践

Q 道具を用いた作業において、経験や技能に個人差があります。どのようなことに留意すればよいですか。

A 安全に作業を行うための注意点を確認するとともに、効果的なグループ学習を計画しましょう。

具体的実践から

１　作業前の聞く姿勢づくり

作業内容について、全員が理解できるように、聞く姿勢（体制）を作ったうえで、ゆっくりと丁寧に説明を行い、同時に安全面での注意も欠かさず行っていました。指示は最低限でという方針から、要点を短く的確に伝えていたので、生徒は戸惑うことなく作業に取り組めていました。

２　学習効果を高める役割分担

のこぎり引きについて、一人が作業をしている場面をグループ内で観察し、お互いに評価し合うという場面が見られました。生徒はグループ内で、作業する人、観察する人、ワークシートにメモする人、その他材料等を固定する人等の役割分担をきちんと行い、スムーズに活動できていました。お互いに評価し合い、アドバイスし合うことで自分の修正点を自覚し、正確に切断するという問題解決ができ、共に学ぶ楽しさも味わうことができました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

グループ学習

○　効果的なグループ学習のために

・素朴な疑問や感じたこと、確認したいことについて気軽に相談できる機会を増やす

・「教え合い」から「学び合い」へ「話合い」から「聴き合い」へ（P.１７）

高松市立桜町中学校　第２学年国語科「単語をどう分ける？」（藤原貴美子先生）の実践に学ぶ

Q 授業中の話合い活動にうまく参加できない子どもがいます。どのようにすればよいのでしょうか。

A 子どもの言葉をもとに授業を展開したり、友達と相談しながら考えを深められるよう工夫したりしてはどうでしょう。

具体的実践から

１　子どものつぶやきを取り上げる

生徒のつぶやきをタイミングよく取り上げたり、答えを教師が言うのではなく、必ず生徒の言葉によって伝えたりするなど、子どもの言葉をつなぐことによって自然に授業が進められている様子が見られました。

２　友達と話し合いたくなる工夫

文法の学習はどちらかといえば静かな授業になりがちで、単語の分類のルールを模索するという難しい内容でしたが、カードゲームによって授業を進めることで友達と相談しながら取り組むことができており、より学びを深めようとする生徒も出てきていました。学校全体で取り組んでいる「ゲーミフィケーション（授業にゲームの要素を取り入れる）」による工夫が見られました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

グループ学習　（P.１６）

○　効果的なグループ学習のために

- 素朴な疑問や感じたこと、確認したいことについて気軽に相談できる機会を増やす
- 「教え合い」から「学び合い」へ、「話合い」から「聴き合い」へ

高松市立太田南小学校　第６学年道徳「ひるがえる校章旗」（太田浩之先生）の実践に学ぶ

Q 話合い活動を活性化させたいのですが、どうすればよいのでしょうか。

A 子どもが話し合いやすい環境を整えるとともに、子どもの意見を視覚化するようにします。

具体的実践から

１　考えをもつ時間の確保、学び方の定着

グループでの話合いを行う前に、個人で考え意見を短冊に書く場を設定しました。こうすることで、発表の苦手な児童も自分で考え、表現することができるようにしていました。

自分の考えを書き終えた子どもたちから、机を合わせてグループの話合いに移っていきました。「自分の考えをもったら友達と話し合う」という学びが根づいていることがうかがえました。グループでは、それぞれが発表した後、「みんなの意見を聞いて思いついたことある？」など、子どもたち同士の自然な話合いが進められていました。

２　活動を支援する思考ツールの活用

思考ツール「クラゲチャート」をうまく活用し、道徳の学習として大切な「多面的・多角的に考える」ことを促していました。個々の考えをクラゲのあしとし、それぞれの考えを比べる、さらにグループごとに作ったクラゲチャートを比べることで多面的・多角的な見方ができるよう工夫されていました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

グループ学習　（P.１６）

○「何のためのグループ学習か？」教師の意図を明確にする。

- 一人一人の立場や意見を確かにして深めたり、新しい考えに気付き広げたりするため。
- 一人一人の活躍の場を増やすため。
- 対話的な問題解決を通して、共に学ぶことの良さを実感させるため。

高松市立香南中学校　第１学年理科「身のまわりの物質」（村川隆基先生）の実践に学ぶ

Q 話合いをする中で、子どもの考えを広げたり深めたりするためには、どんなことを大切にしたらよいでしょうか。

A 話し合う前に子どもに「問い」をもたせ予想させたり、結果から新たな疑問を見いだしたりすることが大切です。

具体的実践から

１　問いの発生と予想

液体の水と油の中に氷を入れるとどうなるか、という生活との関連を図った発問を設定し、生徒に予想させた後、演示実験を行った。生徒は実験結果にどよめきの声を上げて反応し、目の当たりにした不思議に目を輝かせていました。

２　新たな疑問への探究心を育てる

「考察・推論」の場面では、密度の違いによって起こる興味深い現象について、事実を提示して生徒が考えたくなるような学習場面を設定し、知識の再構築や学んだことを次の課題に活用しようとする学習活動が展開されていました。「なぜそのような現象が起こるのか」という教師の問いかけに、密度の知識を基にして説明しようとする生徒の姿が印象的でした。生徒にとって、次の課題を発見したときめきのある学びが見られました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

グループ学習

○「何のためのグループ学習か？」教師の意図を明確にする。

★意図を明確にしたら、単にグループ学習の時間をとるだけでなく、その意図を実現するために必要な「仕掛け」を考えましょう。　（P.１６）

観音寺市立柞田小学校　第３学年図画工作科「ゴムの力で」（中西康代先生）の実践に学ぶ

Q 子どもたちが積極的にアイデアを出したり、創意工夫したりするためにはどうすればよいのでしょうか。

A 考える時間を確保し、自分のイメージを言葉や図などを使って表現する場を設定してはどうでしょう。

具体的実践から

１　実際に作った模型を回してみる

大型の提示模型を使って子どもたちと楽しくやり取りをする中で、子どもたちは製作することへのワクワク感や、作品へのイメージを持つことができていました。子どもたちは、教師とのやり取りの中で「トンボが大きすぎるから回らないよ！」、「男の子との間にある草の竹ひごを短く切ったらうまくいく！」などのつぶやきが自然と出てきており、ゴムの力で回る仕組みを活用した工作に主体的に取り組む様子が見られました。

２　イメージを形に表現する

アイデアスケッチでは、子どもたちはイメージを絵だけでなく言葉で表現したり、画用紙に描いて切り取ってみたり、モールなどの材料を形にしたり、様々な方法で形に表していました。また、すべての子どもたちの活動の様子を確認し、子どもがどこで困っているのかを見取り、想いを聞いて助言をしたりするなど、個に応じた指導に取り組むことで子どもたちは自分に合った方法でイメージを形にしていくことが出来ていました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

学習意欲を高める指導　（Ｐ.１８，１９）

○　子ども自身が選択したり、判断したりできる場面をつくりましょう。

○　子どもが「できるようになりたい」「挑戦したい」と思える工夫をしましょう。

東かがわ市立白鳥小学校　第１学年生活科「ふゆを　たのしもう」（菊本嘉香先生）の実践に学ぶ

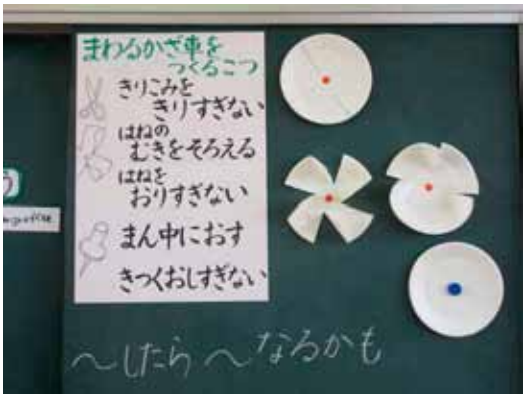
Q 授業の中で、子どもたちが自分から進んで活動するためには、どうすればよいのでしょうか。

A 他の活動や教科の授業とつないだり、子どもが安心して学ぶことができる環境を整えたりしてはどうでしょう。

具体的実践から

１　自分の風車をつくる

前時までに、共通の材料を使って「風車」をつくって遊ぶ活動を行っています。その活動の中で、「回る風車をつくるこつ」を子どもたちは見付け出していました。本時は、その「こつ」を使って、形をかえたり、大きさをかえたり、材料をかえたりしながら、自分の考えた「風車」づくりに没頭している様子が見られました。



２　安心して学べる環境づくり

「こうすれば、できそうだ」という見通しをもって活動を進めることができるよう風車を作成するコーナー、ヒントコーナー、おためしコーナー、ざいりょうコーナーの環境を準備されていました。それらを子どもたち自身が選択して、必要な活動を自由に進める様子が見られました。特に、材料コーナーには、風車づくりの材料が多様に準備されており、子供の「挑戦したい」思いを高める工夫がされていました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

学習意欲を高める指導　（P.１８.１９）

○　子ども自身が選択したり、判断したりできる場面をつくりましょう。

○　子どもが、安心して学ぶことができる関係性をつくれるよう働きかけましょう。

高松市立高松第一中学校　第３学年音楽科「合唱をつくり上げよう」（宮武宏充先生）の実践に学ぶ

Q　子どもが課題に対して主体的に取り組むためにはどうすればよいのでしょうか。

A　適切な支援により課題解決のポイントに気付かせるとともに、グループ活動の意図を明確にしてみましょう。

具体的実践から

１　視覚・聴覚に訴える支援

歌詞に込められた感情を、声の表情で表現するというねらいで進められました。身近な「ありがとう」という言葉を引き合いに、どのような気持ちで言うかによって相手への伝わり方が違ってくることから、既習事項である「魔王」の歌い手について、様々な場面の顔写真を提示することで、声の表情というものを視覚的にイメージしやすくなっていました。

２　パートリーダーの育成

課題解決に向けて、個人で考えたことをパート内で話し合って短冊にまとめ、教室前面に提示することで、全体で共有し、深めようとしていました。パートリーダーの育成を通して、パートごとの感じ方の違いについて意見を出し合い検討させるなど、生徒自身がよりよい合唱にしたいといった意欲を育もうとする教師の意図が見られました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

学習意欲を高める指導

○子どもが「できるようになりたい」「挑戦したい」と思える工夫をしましょう

- 目指すべき姿をイメージさせ、学習の仕方に見通しを持たせる
- 適度に挑戦的な課題を与える
- 振り返りを充実させる　（P.１９）

綾川町立綾南中学校　第１学年理科「身の回りの物質」（中田善司先生）の実践に学ぶ

Q 子どもは楽しそうに活動しますが、その後の話合いがなかなかうまくいきません。どうすればよいのでしょうか。

A 導入や活動前に子どもにとっての「問い」をもたせる場面設定の工夫をしてみてはどうでしょう。

具体的実践から

１　身近な場面からの導入

赤ワインとビーフシチューの写真を掲示しながら、ワインで煮込んだシチューを食べて運転してもよいのだろうかと問いかけ、子どもにとって生活感のある場面をつくり出すことで身近な料理から本時の課題へとスムーズに導くことができていました。また、アルコールという表現が子どもの中から出てきたときに、その沸点に着目させてエタノールであることを意識させ、水との違いを明確にしようとしていました。

２　失敗から学ぶ全体交流

グループ内の友だちと役割を決めるなど協力して実験を進め、その結果から意見交流も活発に行うことができていました。実験結果を発表する際、実験がうまくいかず疑問が出てきたグループをあえて取り上げ、何がその原因であるか前時の学習を振り返って全員で考えるなど、子どもの探究心を刺激する場面が見られました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

学習意欲を高める指導　（P.１８.１９）

○　学習意欲はどんな場面で高まるのでしょうか？

○　子どもが、安心して学ぶことができる関係性をつくれるよう働きかけましょう。

丸亀市立郡家小学校　第４学年社会科「ごみ処理と利用」（櫻井道芳先生）の実践に学ぶ

Q 授業に集中できない子どもがいます。授業に集中して意欲的に取り組むにはどうすればよいのでしょうか。

A 子どもの発言をうまく取り入れて授業を進め、子ども同士で学び合う活動を取り入れてみてはどうでしょう。

具体的実践から

１　教師の発問から子供の意見を引き出す

「なぜ、エコランドの埋め立て期間をのばすことができたのだろう」という本時の問いにより、社会的事象の見方や考え方が働くような問いかけをしていました。児童は、「ごみが減ったのかな」、「どうして減ったのかな。どんな工夫をしたのかな」「だれが減らしたのかな」「施設ががんばったのかな」「いつから取り組んだのかな」とさまざまな立場や時間軸で問いの答えを予想し、追究している様子が見られました。

２　安心して学べる環境づくり

一人一人の学びをよく把握し、「○○さんがこのことを調べていたね」など、その場の状況に応じて適切に判断しながら授業を進めていました。また、児童を指名するとき、十分ではなくとも説明を最後まで聞くことで、説明し終わった児童の表情に自信があふれていました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

学習意欲を高める指導
○学習意欲はどんな場面で高まるのでしょうか？
- 自分で選択したり判断したりできるとき
- できるようになりたいと感じているとき
- 安心して学ぶことができると感じているとき　（P.１８）

高松市立多肥小学校　第３学年理科「明かりをつけよう」（藤原留奈先生）の実践に学ぶ

Q 受け身の子どもが多く、話合いの場面でも活発な意見交換ができません。どうすればよいのでしょうか。

A 好奇心を刺激する教具を準備したり、子どもに疑問をもたせる工夫をしたりしてはどうでしょう。

具体的実践から

１　学習に向かう「しかけ」

児童が「なぜ？」「不思議だ」と思う現象を教師が見せ、児童に単元を通した課題意識を持たせることで、電気の性質を見つけるために実験して調べるという、児童にとって見通しをもった学習活動が展開される「しかけ」がありました。

２　学び合いを生かし個人でまとめる

実験の結果を考察し話し合う場面では、思考を深めるためのワークシートの工夫がみられました。「予想を個人実験により修正し、その結果をグループで確認する」、「グループで確かめた結果から考えたことを自分の言葉で記入する」、「それぞれが考えたことを共有し、思考を広げたり深めたりする」このことが、１枚の用紙上で構造的にまとめられるワークシートでした。まとめる場面の前にグループで意見交換をしっかりさせていれば、異なる意見や新しい気付きを基にして、児童は自分の言葉でわかったことをまとめようと思考する過程を大切にしていました。

「さぬきの授業基礎・基本」では

学習意欲を高める指導　（Ｐ.１９）

○　子どもが「できるようになりたい」「挑戦したい」と思える工夫をしましょう。

グループ学習　（Ｐ.１６）

○　「何のためのグループ学習か？」教師の意図を明確にする。

高松市立栗林小学校　第４学年理科「ごみ処理と利用」（仁科大成先生）の実践に学ぶ

Q 単元を通して子どもの学習意欲を継続させるにはどうすればよいのでしょうか。

A 目指そうとする姿を明確にし、子どもとともに「問い」をつくってみてはどうでしょう。

具体的実践から

１　単元を通して目指す姿

授業を実施するにあたり、目指す姿を明確にして単元計画をたてて本時を位置付け、そのねらいを的確に捉え、ねらいに迫る問いを設定できていました。単元の導入部の授業が公開されていましたが、単元全体で児童の資質・能力を伸ばそうとするこれからの方向性がよくあらわされていました。

> 私たちの健康や生活環境を支える事業として廃棄物の処理がある。廃棄物の処理は、環境に配慮しながら地域、企業、市や県内外の人々の協力によって計画的に進められ、生活環境の維持と向上に役立っている。また、限りある資源を大切にし、資源の節約や有効利用を進めることで循環型社会を目指している。
> この循環型社会を実現するためには、私たちの行動が欠かせない。循環の輪の一部であることを自覚し、自分の使ったものに対して、最後まで責任をもてる人でありたい。

２　子ども自身の「問い」へ

「自分たちの身の回りのごみは、どのように処理されるのか。」という素朴な疑問は、「ごみは最終的に埋め立てられるが、その埋め立て場はあと 20 年ほどでいっぱいになる。」という現実を知ることで、「どうすればごみ問題を解決できるのか。ごみの処理の仕組みを知り、ごみ問題を解決したい。」という子どもの意識の高まりが見られました。これにより、単元の学習の見通しがもてるように工夫されていました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

学習意欲を高める指導　（Ｐ.１９）

○　子どもが、「できるようになりたい」「挑戦したい」と思える工夫をしましょう。

考える力を育てる指導　（Ｐ.２０）

○　思考力の働いている子どもを具体的な姿で描く。

三木町立白山小学校　第２学年音楽科「ようすを音楽で」（磯崎真里先生）の実践に学ぶ

Q 歌い方を工夫しながら表現する楽しさを味わわせるには、どうすればよいのでしょうか。

A いろいろな表現の仕方で歌ったり、友達の表現のよさに学んだりする学習を取り入れてみてはどうでしょう。

具体的実践から

１　子どもの思いを言葉にする

「『きらきら』を大きく歌いたい。そうしないと、きらきらしているように見えないから。」「『きらきら』を響く声で歌いたい。言葉がきれいだし、そういうふうに歌ったら星もきれいになるかなあと思ったから。」「ぼくは、『きらきら』をおさえて歌いたい。寝た子どもが起きないように。」

子どもたちは、自分が歌いたい「夕やけこやけ」を次々に発表していきました。自分なりの感性を働かせて、想像をふくらませています。教師が、「こういうふうに歌いましょう。」と決めるのではなく、いろいろな歌い方で曲の感じが変わる面白さを味わわせることが、特に低学年の子どもにとって大切になるのでしょう。

２　表現する楽しさを味わわせる

人前で歌うことにためらう子どもに負担をかけないよう、３人グループでの交流の場をもちました。自分の考えた表現の仕方をグループのメンバーに伝え、一緒に歌っていくことで、交流を通して、自分の考えた歌い方で友達が歌ってくれる喜びや、友達の考えた表現の良さに気付き、歌うたびに声が響くようになっていきました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

学習意欲を高める指導
- ○　子ども自身が選択したり、判断したりできる場面をつくりましょう。
- ○　子どもが安心して学ぶことができる関係性をつくれるよう働きかけましょう。

（P.１８、１９）

宇多津町立宇多津小学校　第５学年家庭「ひと針に心をこめて」（大西昌代先生）の実践に学ぶ

Q 経験や技能に差がある子どもたちの学習意欲を高めるためどのようにすればよいですか。

A 子どもが自分で選択できる場面を設けたり、楽しみながら技能習得ができる活動を取り入れたりしてみましょう。

具体的実践から

１　自分で選択・判断する機会を保障する

「教師も作品作りをしたいのだけれども、どの縫い方をすればよいか迷っている」という状況を示すことによって、縫う場所によって縫い方を変える必要があることや、簡単な「なみ縫い」であっても、工夫することで丈夫な縫い方ができることに気付くことができました。その後の製作活動では、どの児童も自分が選んだ縫い方の理由をはっきりもち、活動に取り組むことで、目的に応じた縫い方をする良さを実感する様子が見られました。

２　楽しみながら技能習得ができる環境づくり

「習った縫い方→作品作り→使ってみる→もっと作りたい」という学習のサイクルが確立されており、児童が自ら技能を高めたくなる状況がつくられています。授業においては、繰り返し練習したり、タブレットを活用して縫い方を確認したりするなど、技能差のある児童が安心して活動に取り組めるような支援が見られました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

学習意欲を高める指導　（P.１８）

○　学習意欲はどんな場面で高まるのでしょう。

・子ども自身が選択したり、判断したりできる場面をつくりましょう。

・子どもが安心して学ぶことができる関係性をつくれるよう働きかけましょう。

まんのう町立満濃中学校　第３学年数学科「図形と相似」（岡原秀和先生）の実践に学ぶ

Q 立体などのイメージがつかみにくい学習で、子どもたちが考えを進めるにはどうすればよいのでしょうか。

A 身の回りの具体物を提示したり、考えを進めるための見通しを共有したりしてはどうでしょう。

具体的実践から

１　実際に販売されている商品の提示

身の回りにあるものから、大きさの異なる立体を提示し、子どもたちに相似な立体かどうかを問いかける場面が見られました。実物を提示することで、子どもたちは相似な立体について実感として理解することができていたようです。さらに、商品である立体の高さや直径と値段を表示して、どちらが割安かを調べる活動へと、自然に子どもの思考を導いていく様子が見られました。

２　既習をもとにした解決への見通し

全員参加の授業を目指して、自分で考えて分からないことがあるときには、素直に「分からないので教えて」と聞くことのできる雰囲気を大切にしている様子が見られました。また、考える場面で困っている生徒がいるときには「これまで学習したことが使えないか」と既習事項につなぐことで、迷っていたり、悩んでいたりする子どもたちに対して、考えを進めるきっかけとなっている様子が見られました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

考える力を育てる指導

○　考えたくなる課題を設定する。

○　課題解決の手掛かりに気付かせる。　（P.２０）

善通寺市立筆岡小学校　第６学年算数科「場合を順序よく整理して」（木戸口千夏先生）の実践に学ぶ

Q 文章で書かれた問題場面の理解を苦手とする子どもがいます。どうすればよいのでしょうか。

A いくつかの部分に分けたり、簡単な図や表などを使って整理したりしてみてはどうでしょう。

具体的実践から

１　場面の中に児童をおく

問題を全員で声に出して読み終えた後、「自分だったらどれに手を挙げますか？」といった問いかけで実際に学級の子どもたちが挙手し、みかんだけに手を挙げた人，バナナだけに手を挙げた人，両方に手を挙げた人の３つの仲間に分かれることを体験できるようにしていました。これにより、文章を読んだだけでは理解が不十分な子どもたちも、問題場面の把握につながっている様子が見られました。

> 子ども会で，みかんとバナナを配ります。欲しい人に手をあげてもらったら，
> みかんに手をあげた人は 18 人，
> バナナに手をあげた人は 20 人
> で，そのうち両方に手をあげた人は 11 人でした。
> 全員に 2 個ずつ配るとき、みかんは何個、バナナは何本用意すればよいですか。

２　自分で考えるための工夫

見通しの段階で，みかんの図，バナナの図を別々に作ったものを提示することで，重なる部分があることに気づけるようにし，２つを合わせた図へと導く様子が見られました。解決に当たっては、１人で考える時間を確保するとともに、色の異なる半透明のテープを２本準備することで、場面整理の道具として活用する姿が見られました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

考える力を育てる指導

○　子どもが考える場面を十分に確保する。

○　思考が進みにくい子供のためにひと工夫する。　（P.２１）

三豊市立高瀬中学校　第１学年道徳「いのちをいただく」（松村仁美先生）の実践に学ぶ

Q 話合いが空回りしてしまうのですが、どのようなことに気を付ければよいのでしょうか。

A 子どもの心に響く資料を活用し、身近なこととつなぎながら具体的に考えられるようにしましょう。

具体的実践から

１　育てたい力にふさわしい資料の活用

道徳の授業では、資料の選定が学習の深まりに大きな影響を与えます。

この授業で扱った「いのちをいただく」という資料は、授業者が地域の人権福祉センターの方と協力しながら教材研究し、作り上げたもので、食肉加工センターに勤める坂本さんの、牛の解体に際しての思いを綴った資料です。「ごめんよう。みいちゃん（牛）が肉にならんと、みんなが困るけん。」といいながら、解体に臨む坂本さんの姿が、自ずと涙を誘います。勢い、この授業に臨む子どもたちも真剣なものとなりました。

２　身近なこととつないで考える

授業の導入で給食に関するアンケートを紹介したり、「牛肉」から連想する「肉牛」や「パック売りの牛肉」などの写真を提示したりして、身近なことから授業に入り、そこから、しだいに授業の本題へと導いていきました。

さらに教師は、紙芝居で本時の資料「いのちをいただく」を語りかけました。平易でありながら、子どもたちに訴えかける言葉と絵は、子どもたちを資料の話に没入させていきました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

考える力を育てる指導
- ○　考えたくなる課題を設定する。
- ○　子どもが考える場面を十分に確保する。　（P.２０、２１）

高松市立太田中学校　第３学年数学科「関数 $y=ax^2$」（木村智恵先生）の実践に学ぶ

Q 習熟度に差がある子どもたちに対して、「考える力」を育てるにはどうすればよいのでしょうか。

A 学習の振り返りで既習事項を確認したり、子どもが考える時間を確保したりするようにします。

具体的実践から

１　学習への導入の工夫

「これまでに学習した関数にはどのようなものがありましたか」と問いかけ、比例、反比例、一次関数ついて振り返る場面を設けて確認していました。また、実際にカーテンレール上を転がるビー玉を観察し、メトロノームを使って、生徒自身が１秒ごとの玉の位置を確認し、印をつける活動を通して、時間とともに動く玉の位置を目で見て確認できるようにしていました。印をつけた玉の位置から、関数 $y=ax^2$ の関係がイメージできるよう工夫されていました。

２　考えの進まない子どもへの支援

この事象における表や式、グラフの特徴について説明する場面では、自分で考える時間を設け、考えの進まない生徒には、それぞれの関数の特徴と比較することで、その違いに気づくことができるよう助言していました。自分で考え、自分なりの言葉で表現したものを持ち寄り、グループで発表し、考えることにより、それぞれの考えが深められるよう工夫されていました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

考える力を育てる指導

○　考えたくなる課題を設定する。

○　課題解決の手掛かりに気付かせる。　（P.２０）

丸亀市立南中学校　第３学年国語科「レモン哀歌」（横田義崇先生）の実践に学ぶ

Q 話し合う活動を設定しても、子どもからの意見があまり出ません。どうしたらいいでしょう。

A 子どもにとって身近な事柄と関連させたり、子どものつぶやきをつないだりしてみてはどうでしょう。

具体的実践から

１　課題提示の工夫

子どもが自分のこととして取り組むための手立てとして、「レモン哀歌」と市川海老蔵のブログというどちらも最愛の妻の死を扱った文章を比較することで、内に秘める思いと言葉に出す思いとでは、どちらがよいか考えるきっかけとなっていました。

２　子どもの意見の視覚化

「レモン哀歌」の詩を黒板に掲示し、「死」に関わる言葉と、逆に明るいイメージをもつ言葉について、グループで意見を共有しながら生徒に挙げさせ、それぞれを色分けしながら板書に示すことで視覚的に理解しやすくなっており、五感を働かせて理解の定着を促すという点で重要な役割を果たしていました。生徒の意見はできるだけ板書し、それが後の発問のヒントとなるよう生徒の言葉をつなげていきながら授業を構成すること等が提案されました。

「さぬきの授業基礎・基本〔改訂版〕」では

子どもの実態に合わせた指導

○　授業に向かう子どもの様子に注目

・個別の支援をしてもなお、子どもの理解が不十分なときには思い切って指導計画を変更してみることも大切です。　（P.２２.２３）

Ⅲ　おわりに

印象に残った総合授業カリーダーの先生方の言葉を紹介します。

○　『子どもは失敗することで、何が原因なのかということに意識が向き、探究する姿勢が養われるのじゃないでしょうか。』

「前時の授業で、うまくできなかったグループがありましたが、本時までに教師が修正しているのですか」との質問に対する授業者の言葉です。子どもは学びの過程で、うまくいくこともあれば失敗することもあります。なぜ失敗したのか、その原因を探る姿勢こそ大切なのだということを考えさせられました。

○　『学級で身に付けたいろいろな力が授業で発揮されます。そして、その様子を担任の先生に返し、次につなぐようにしています』

専科として授業をされている先生の言葉です。授業では、子どもたちの学びや経験が、表現されます。学級ごとにその学びや経験が異なることから、こうすれば必ずうまくいくといった授業のマニュアルがあるわけではありません。子どもたちと誠実に向き合う、「教師としての構え」の大切さについて考えさせられました。

○　『近隣のセンターに資料を提供していただきました。また、学年団で何度か事前に話し合いました。』

「豊富な資料や教具をどうやって準備したのか」との質問に対する授業者の言葉です。学校には頼りになる先生方がいます。地域には豊富な資料が蓄積された図書館等の施設があります。カリキュラム・マネジメントの三つの側面の一つである「教育内容と教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること」の大切さについて考えさせられました。

授業に臨む姿勢や、教材研究の深さ、子どもとの温かい関係、綿密な指導計画など、学ぶべきたくさんのことが、総合授業カリーダーの実践からみてとれます。本冊子が授業改善のきっかけとなり、子どもたちの「夢と笑顔」につながることを心から願っています。

さぬきの教員　かかわりの三訓

一　共感的に受け止め

二　チームの力で

三　毅然と粘り強く

香川県教育委員会

さぬきっ子　学びの三訓

一　準備して

二　姿勢整え

三　しっかり聞こう

香川県教育委員会